

バードリサーチ ニュース

2011年7月号 Vol.8 No.7



Phalacrocorax carbo
Photo by Watanabe Yoshiro

活動報告

秩父ライブの聞き取りの結果から2 ～種によるさえずり頻度の季節変化の違い～

植田睦之・黒沢令子・斎藤馨(東京大学)

5月号のニュースレターでも報告しましたが、東京大学秩父演習林からライブ配信している「ブナ・イヌブナ天然林内の音」を聞き取ることで鳥の鳴き声の季節的、日周的な変化の調査を行なっています。6月下旬にエゾハルゼミの声で聞き取りがしにくくなったため、現在は調査を休止していますが、ここまで得られた結果をご報告します。

さえずり頻度の季節的な変化に注目

今回ご報告するのは種によるさえずり頻度の季節的な変化の違いです。これまで、つがいを形成する時期にさえずり頻度が高まるということがいくつかの種について研究されていますし、経験的に「ウグイスやメボソムシクイは夏までずっと鳴いている」とか知られていることはありますが、いろいろな種について比較可能なデータを示したものはなかったのではないかと思います。

聞き取りは3月に開始し、6月20日まで行ないました。日の出の前後30分、計1時間の区間について、さえずりが聞こえた割合(1時間ずっと鳴いていたなら1、鳴いていたのが20分だったら20÷60=0.33)を種別に集計しました。さえずりは、天気の良い日は活発ですし、雨の日是不活発になります。そのため、上で計算した割合をそのまま示すと、グラフはガタガタになって傾向を読み解きづらくなります。そこで、当日と前後2日間の計5日間のデータを平均した「移動平均」でグラフを平滑化して傾向を示してみました。

対象とした鳥は、調査期間にさえずりが10日以上記録さ

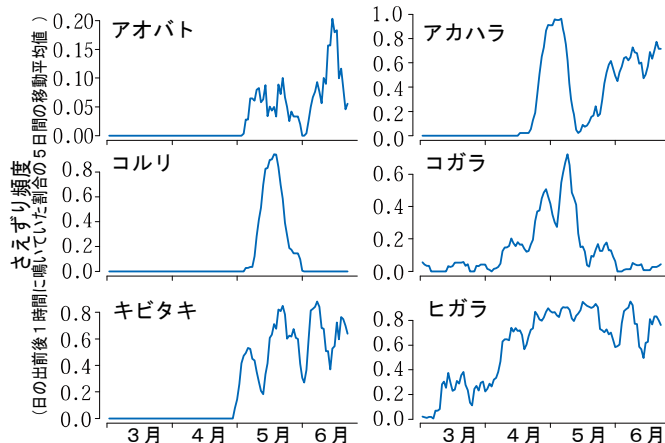


図. 各種鳥類のさえずり頻度の季節変化。

れていたアオバト、ホトトギス、ジュウイチ、コルリ、アカハラ、トラツグミ、キクイタダキ、キビタキ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、イカルです。すべての種のグラフをここに示すことはスペースの都合上できないので、代表的なグラフを図に示しました(全種見たい方は<http://www.bird-research.jp/1/saezuri/>よりご覧ください)。ヒガラやキビタキのようにいつまでも鳴いている種、コルリやコガラのようになんと鳴いてその後あまり鳴かなくなる種、アカハラやアオバトのように2度のピークがある種など種によってさえずりのパターンが異なっていることがわかりました(表)。山の鳥をモニタリングするためには特に、コルリなどのようなさえずりのピーク期間の短い鳥を記録できるような調査スケジュールを組む必要があるでしょうし、既にとったデータの解析をする上でも、こういった鳥の記録状況は調査時期によっては記録できていない可能性があることを頭において行なうべきだということが今回の結果からわかりました。

表. 各種鳥類のさえずりパターンの区分け。

ピーク1回	コルリ, キクイタダキ, コガラ, ゴジュウカラ, キバシリ
ピーク2回	アオバト, ジュウイチ, アカハラ, トラツグミ
長期さえずり	キビタキ, ヒガラ
パターン不明瞭	ホトトギス, ヤマガラ, シジュウカラ, メジロ, イカル

こうした種による違いはなぜ生じるのでしょうか? 2度のピークがある鳥には身体が比較的大きいという共通点がありました。ここには含んでいませんが、大型キツツキのドラミングの頻度も2度のピークがありそうでした。もしかすると大型の鳥に共通するような社会的な要因がこのパターンを生み出しているのかもしれませんが、いつまでも鳴いている鳥は一夫多妻などで、繁殖期間が長い種だと原因がわかりやすいのですが、今回そこに区分されたヒガラやキビタキは一夫一妻なので、そうではないようです。何故なのかよくわかりません。

調査のこれから

今年は春先寒い異常気象の年でした。今回得られた結果はその影響を受けている例年とは違う傾向なのかもしれません。また、標高の低い地域ではカラ類は2度繁殖しますが、標高1000mの秩父では繁殖回数は1回です。こうした場所間の違いもあり、ほかの地域のさえずりパターンが秩父と同じだとも思えません。来年もこの調査を継続し、また全国の状況についても情報収集しながら、さらに調べていきたいと思っています。皆さんの地域のさえずりパターンなど、情報いただけたら幸いです。

活動報告

ツバメの初認と巣立時期との関係

神山和夫

バードリサーチニュース5月号でお伝えしたように、今年（2011年）はツバメの初認（※）が2005年の調査開始以来、一番遅い年でした。それでは巣立も遅れているのでしょうか？ツバメ調査参加者の皆さんに巣立状況のアンケートをお願いしたところ、7月15日までに124件の方からご報告をいただきました。その結果をもとに2005～2011年までの巣立ち時期についてまとめてみました（図1）。

今年の巣立ち時期はかなり遅いのではないかと予想していましたが、全国的な状況を見ると、やや遅い程度だったようです。巣立は暖かい地方ほど早い可能性があるのですが、全国データをグラフにすると傾向が見えにくくなるかとも考えて、報告件数の多い関東東海地域だけでも比較してみました。全国のデータと大きな差はありませんでした。

5月号に掲載した初認時期のグラフも参照していただくとわかりますが、初認が早かったのは2009年、2010年です。一方、巣立ちは最初のピーク時期で見る限りは2009、2010年が特に早いとは言えそうにありません。

それでは、巣立ち時期は何によって決まるのでしょうか？産卵するにもヒナを育てるにもエサの量が大事ですから、エサとなる虫の発生状況が巣立ち時期に関係しているのかもしれない。虫の発生時期は気温と関係がありそうなので、報告件数が多い関東地方の代表としてバードリサーチ事務所周辺の3～5月の平均気温を気象庁のアメダスHPで調べてみました。すると、巣立が最も遅かった2010年は4月の気温が一番低い年だったことはわかりますが、それ以外の年の気温と巣立ち時期との関係はあまりはっきりしないようです（図2）。

巣立ちの報告は件数が少ない年もあり、そのような年は巣立ち時期の評価が不正確になってしまうため、ぜひ多くの皆さんの協力をお願いいたします。

（※）バードリサーチのツバメ初認調査は、軒先に来た初認を調べてます。

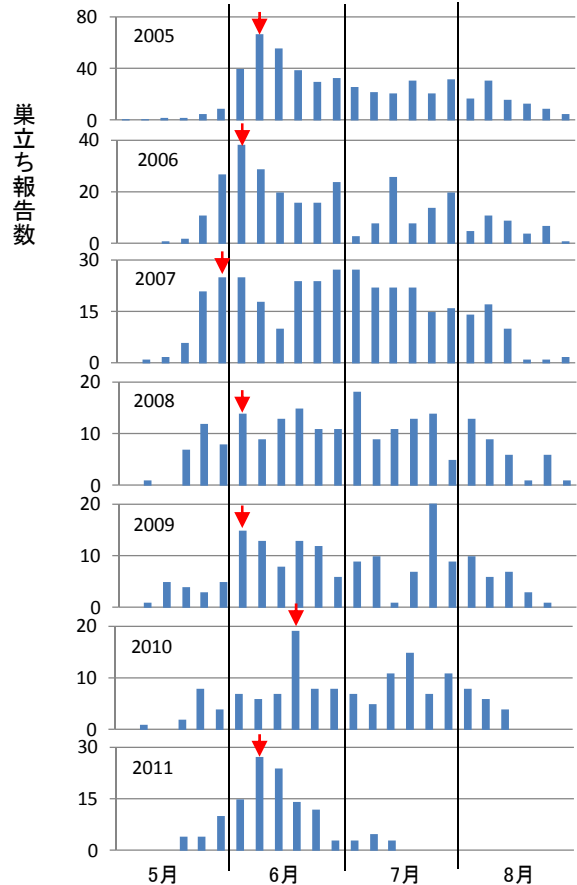


図1. ツバメの巣立報告数.. 赤矢印は最初の巣立ピーク。

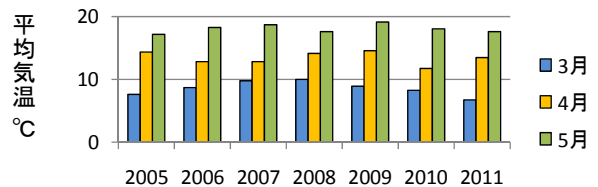


図2. 東京都府中市の月別平均気温

お知らせ

生態図鑑のPDF版を販売開始します。

バードリサーチニュース、創刊すぐより開始して、毎号欠かさず掲載してきた生態図鑑。ついに80種を超えました。ニュースレターの記事の中でも人気ナンバーワンのコーナーですので、ニュースレターのPDF版を読めない協力会員の方も見られるように、また、バードリサーチの宣伝として、会員外の方も見られるようにPDF版を販売することにしました。



図. 生態図鑑サンプル。

PDF版は単にこれまでの生態図鑑を1つにまとめただけでなく、多くの種については鳴き声を聞けるようしたり、また、一部については動画が見られるようにしています。PDF版は今後も改訂を続けていきます。まだ動画を掲載できていない種があまりありませんので、生態図鑑掲載種の生態を捉えた動画をお持ちの方はぜひご提供ください。

【植田睦之:mj-ueta@bird-research.jp】

● 購入方法

以下のサイトから購入することができます。普通会員の方は500円、協力会員および非会員の方は2000円です。ページ内のボタンよりクレジットカードでお支払いいただければ、PDFファイルをダウンロードするためのIDとパスワードをお知らせします。

■ 生態図鑑の購入のページ

http://www.bird-research.jp/1_shiryu/seitai.html

レポート

千葉県でのサギ標識調査について

山口誠 NPO法人行徳野鳥観察舎友の会

私達NPO法人行徳野鳥観察舎友の会では、2007年から毎年県内のサギ類の標識調査に関わっています。コロニー内でサギ類の巣内ビナの脛(すね)に個体識別用のカラーマークをつけ、それらが後日どこかで観察されることにより千葉県で繁殖するサギの渡りルートや寿命などについて調査しようというものです。今までは一宮町、白井市、袖ヶ浦市、市川の行徳鳥獣保護区で行ってきました。

館山市の標識調査

今年は館山市のコロニーで標識調査を行いました。この場所は約1000羽のシラサギ類やゴイサギが繁殖しており、樹林と竹やぶで構成されたコロニーです。外観は川と畑に囲まれており静かな感じなのですが、中に入るとサギの鳴き声がそこかしこで響いて非常ににぎやかです。竹が密生しており中を脚立を持って移動するのは大変でしたが、所々に開けた空間があり何とか調査をすることが出来ました。



写真 標識されたコサギ。

標識調査は適度な大きさのヒナがいる巣を見つけたら、脚立を立て素早くヒナを捕まえます。捕まえたヒナにはカラーマークと環境省の標識リングを付けて巣に戻します。小さいヒナの場合はカラーマークは付けず、標識リングのみを付けます。サギのヒナは産毛がぼわぼわでとてもかわいいですが、巣から長い間離す事はできないので作業は手早くやらないといけません。今回はチュウサギ、コサギ、アマサギ合わせて72羽にカラーマークを装着しました。

吐き戻してわかるサギの食性

調査中に幼鳥がびっくりして餌を吐き戻してしまうことがあります。せっかく食べた餌を吐いてしまうのはちょっと可哀想ですが、吐き戻しの内容物から、そのコロニーのサギが何を食べているのかを調べることができます。今回確認さ

れた内容物は、アマサギがコオロギ、カナヘビ、アマガエル(オタマジャクシ含む)、コサギがカタクチイワシ、ドジョウ、アメリカザリガニ、アマガエル(オタマジャクシ含む)、チュウサギがドジョウ、アメリカザリガニ、アマガエル(オタマジャクシ含む)でした。アマサギの食性が他種とは違うのと、コサギの新鮮なカタクチイワシが特に興味深いものでした。カタクチイワシは近くの海岸から捕まえてきたのか、それとも水揚げされた港から運んできたのかもしれない。

標識調査によりわかってきたこと

千葉県内では、現在までに計674個のカラーリングを装着しています。そのうち、野外での観察例は17羽と、残念ながら非常に少ないのが現状です。図は、放鳥されたコロニーの場所と、県内で標識されたサギ類が観察された場所を示しています。コロニーのすぐ近くでの記録もありますが、東京湾岸域での記録が多いようです。遠くでの記録は国内は鹿児島県、国外ではフィリピンのバタン島で観察された例があります。また、2007年一宮町で標識されたコサギが2008年以降九十九里町の片貝漁港で毎冬見られています。

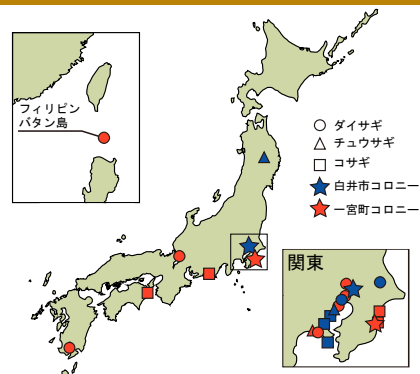


図 標識されたサギの再確認地点。青色は白井市のコロニー放鳥、赤色は一宮町のコロニー放鳥の個体。

観察情報求む！

観察情報をもっと集まれば、千葉県で産まれたサギ類の移動や分散をもっと明らかにしていくことができます。カラーマークにはアルファベット1文字と数字2文字の識別番号が書いてあります。カラーマークを着けたサギを見かけた方は、是非、マークの色と番号を行徳野鳥観察舎友の会までお知らせください。

連絡先:NPO法人行徳野鳥観察舎友の会
tomonokai_kawau@ybb.ne.jp

研究例会のお知らせ

● 研究例会 & 納涼ツバメ観察会 8月6日開催

暑くなってきました。繁殖を終えたツバメがヨシ原のねぐらに集まってくる時期です。バードリサーチ事務所のそばの多摩川のヨシ原にも、すでに数千羽のツバメがねぐらをとりに始めています。そこで、納涼ツバメ観察会を企画しました。ビール(麦茶)片手にツバメのねぐら入りを眺めようと思います。また、その観察会の前に、15時から府中文化センターでツバメのねぐらの状況などを報告する研究例会も開催したいと思います。どちらか片方だけの参加も歓迎です。

研究例会の様子はUstreamでライブ中継をします。

Twitterで質問ができますので、お越しになれない皆様は、ぜひインターネットでご参加下さい。詳細は以下のHPよりご覧いただけます。

<http://www.bird-research.jp/1/reikai/>



図. ツバメ観察会の観察場所。府中四谷橋北、または日野落川バス停で下車。徒歩400m程。

リュウキュウコノハズク 英:Ryukyu Scops Owl 学: *Otus elegans*

1. 分類と形態

分類: フクロウ目 フクロウ科

本稿では主に、沖縄島と南大東島に生息する個体群について記述する。

沖縄島個体群

全長 約20cm
 自然翼長 168.8mm
 (162.0-177.0)
 尾長 74.9mm (69.0-82.0)
 全嘴峰長 21.3mm (18.8-24.0)
 ふしよ長 31.6mm (29.2-33.5)
 体重 112.2g (94.0-125.0)

* オス17個体の計測値に基づく。
 外山私信。



Photo by 高木昌興

写真1. 巣から顔を出したヒナと、餌のアシダカグモを運んできた親(南大東島)。

南大東島個体群

全長 約18cm
 自然翼長 ♂155.3mm (148.5-165.5) ♀155.7mm (149.0-165.0)
 尾長 ♂72.60mm (64.43-80.20) ♀71.85mm (61.51-77.01)
 全嘴峰長 ♂20.50mm (18.31-22.90) ♀20.86mm (19.47-22.51)
 ふしよ長 ♂29.92mm (28.13-31.74) ♀29.73mm (28.05-31.77)
 体重 ♂84.46g (70.0-102.0) ♀92.44g (78.0-111.5)

* 2002年から2009年までの1歳以上のオス86個体メス54個体の計測値に基づく。尾長は、尾羽がすり切れている個体は省く。体重は、産卵直前のメスは省く。

* Severinghous *et al.* 2002によると、南大東島個体群は他地域と比べて著しく小型である。

羽色:

雌雄同色。上面は褐色で、全体に黒色や黄褐色の複雑な斑がある。肩に白色の斑が縦に並んでいる。下面は灰褐色で、黒褐色の縦斑と微細な横斑がある。顔盤は灰色で赤褐色の羽毛が縁取っている。嘴は濃灰色。虹彩は黄色。警戒すると赤褐色の羽角を立てる。足指は灰色で、羽毛は生えていない。

鳴き声:

よく知られているのはオスのテリトリーコールで、コ、コホッまたはコホッと繰り返して鳴く。他にも、個体や状況によって、様々な声を出す。メスはギョホッと濁った声、またはフニ、フニャアとネコのような声で応える。オスもごくまれにネコのような声を出す。雌雄共に、少し緊張したときにはホーウと一声、威嚇するときにはシャーシャーという音、巣が襲われたときなどには、鋭くクオッククオックと警戒声を発する。つがい相手に甘えるときにはプルプルとささやくような声を出す。交尾の時に、オスがキュルルと甲高い声を出す。この声は、メスが求愛給餌を受けるときや、ヒナが興奮したとき(餌をもらうときや枝に飛び移るとき)に発することもある。またヒナは、巣で餌を待っている間、ギューギュー、ジャッジャッと聞こえる声で鳴き続ける。

2. 分布と生息環境

分布:

南西諸島の島々に基亜種リュウキュウコノハズク (*O.e.elegans*)、大東諸島に亜種ダイトウコノハズク (*O.e.interpositus*)、台湾南東のランユウ島に亜種ランユウコノハズク (*O.e.botelensis*)、フィリピン北端のバタン諸島、バブヤン諸島に亜種カラヤンコノハズク

(*O.e.calayensis*)が分布する。2008年に福岡県の沖ノ島でも捕獲され、生息が確認された。現在、亜種ダイトウコノハズクが生息しているのは大東諸島の中でも南大東島のみである。

生息環境:

本来は発達した古い森林に生息するが、農耕地などの比較的開けた環境にも生息している(写真2)。営巣環境は、樹洞のある林地であるが、人工構造物で営巣した例もある。また、採餌場所は、とまり場さえあればかなり開けた畑や草地、住宅地なども利用し、人為的に改変された環境にも順応して生息している。



写真2. (左)沖縄島の生息地。やんばる地域の森林。(右)南大東島の生息地。開けたサトウキビ畑と細長い防風林。

3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
繁殖システム:	越冬期		繁殖期				越冬期					

一夫一妻制で、年1回繁殖する。失敗後もやり直し繁殖はしない。雌雄共に1歳で性成熟するが、空きなわばりが不足しているような環境では、1歳から繁殖できる個体は多くはない。オスはなわばりを獲得するとメスを呼び込み、つがいはほぼ1年中なわばり内ですごす。つがい関係は経年的に維持されるが、しばしば離婚も起こる。南大東島では約15%の巣でつがい外受精が確認されている。

巣:

樹洞で繁殖する。沖縄島のやんばる地域では主に、イタジイやウラジロガシに造られたノグチゲラの古巣を利用する。平均サイズは、入り口直径6.5cm、底面15×15cm、深さ30cm (Toyama 2010)。一方農耕地では、防風林としてよく利用されるモクマオウの樹洞に営巣する。同様に、農耕地が広がる南大東島でも、営巣木の90%以上がモクマオウである。利用されたモクマオウの胸高直径は平均57cm (27~88cm)、樹洞の大きさは、入り口長径39.8cm (10~125cm)、短径11.6cm (6~24cm)、深さ52.4cm (14~162cm) (n=30)。ダイトウビロウの枯死木の上部分が折れた筒状の縦穴も利用するが、数は少ない。

一腹卵数, 卵サイズ, 卵色:

一腹卵数は1~4卵。沖縄島、南大東島共に、半数以上が3卵、約3割が2卵を産む。1卵と4卵はまれである。1~2日おきに産卵する。卵は白色無斑で、長径約33mm、短径約27mm (卵計測値は南大東島)。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

沖縄島では4月下旬 (Toyama 2010)、南大東島では3月下旬から産卵を開始する。抱卵開始から孵化までは26日間で、メスのみが抱卵を行う。育雛期間は約30日間。ヒナが10日齢前後に成長するまでメスは抱雛を行い、給餌は

オスのみが行う。それ以降は雌雄で給餌を行う。巣立ち率は沖縄島で74% (n=141) (Toyama 2010), 南大東島で79% (n=100)。主な繁殖失敗原因は、沖縄島ではヘビによる捕食で、南大東島では移入種のクマネズミ、イタチ、ノネコによる捕食である。巣立ち後20日から40日間親のなわばり内で給餌を受ける。

ねぐら:

南大東島では、日中休むのはもっぱらダイウビロウの林である。ダイウビロウの葉柄の付け根にとまっていると、ヤシ科特有の茶色い繊維に紛れて、姿を見つけるのは容易ではない。さらに外敵が近づくと、身を細くし、羽角を立てて擬態するので、その効果は倍増である(写真3)。



写真3. ダイウビロウの付け根にとまって擬態している(南大東島)。

4. 食性と採食行動

主に昆虫食である。巢内ビナに運ぶ餌内容で見ると、沖縄島ではコロギスやキリギリスなどの直翅目が80%を占め、他にヤモリ類、ナナフシなどを捕食する(Toyama 2010)。南大東島ではアシダカグモとワモンゴキブリが最も多くそれぞれ25%を占め、次いで直翅目、ヤモリ類、鱗翅目が多い。採餌方法は、止まり木から地上または樹上の獲物に飛びかかることが多い。飛翔性昆虫をフライングキャッチすることもある。南大東島では、ガジュマルなどのイチジク科の樹木が茂った林を好んで利用することが分かっている。また、林縁部から畑や草地の獲物を捕食することもある。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 亜種間の鳴き声の違い

島々に生息するリュウキュウコノハズクの鳴き声には、地理的変異があることが分かった。台湾のランユウ島と南西諸島の22の島々から合計718個体のオスの鳴き声を録音し、スペクトログラム上で計測した周波数と時間に関する4成分を用いた分析の結果、鳴き声は沖縄島と宮古島の間にある慶良間海裂で南北に分けられ、さらに南大東島は単独のグループを形成した。つまり、鳴き声から見るとリュウキュウコノハズクは、沖縄島以北、宮古島以西、南大東島の3つのグループに区分できると考えられた。

● なわばり飽和環境での若鳥の分散

南大東島では、ダイウコノハズクは帯状に残された防風林にのみ生息しており、なわばりを構えることができる場所は限られている。そのため、なわばりのほとんどは成鳥に占められ、新たに分散した若鳥が定着できる空きスペースは少ない。ラジオテレメトリーを用いて38個体の巣立ちヒナを追跡した結果、16個体は翌年の春まで生存したが、そのうち7個体は定着することができず放浪個体となった。また、繁殖シーズンの初期に生まれたオスほど、出生地から近い場所に、遅く生まれたヒナほど遠くになわばりを獲得し

ていた。実際、オスヒナは親のなわばりを出た後、いろいろな場所を行ったり来たりせず、空いた場所を見つけたらすかさずそこに定着していた。まさに早い者勝ちのなわばり獲得戦略である。

● 移入種は駆除すべき?

南大東島は、在来の環境がほとんど残っていないほど、改変と移入が行われた島である。その結果、鳥類では4亜種の固有亜種が絶滅したが、ダイウコノハズクは絶滅を免れた。個体群の維持に重要な役割を果たしたのが、人が植樹した移入種モクマオウである。モクマオウは成長が早いと、湿地の土固めや伐採後の防風林として多く植林された。さらにモクマオウは非常に樹洞を形成しやすい。植林前に主に巣として利用されていた在来種ダイウビロウと、モクマオウとで樹洞が形成される割合を比較すると、モクマオウはダイウビロウより15倍多く樹洞が形成されていた。そのため前述の通り、現在は繁殖巣のほとんどがモクマオウの樹洞である(写真4)。森林が激減した南大東島では、人が移入した木が営巣場所を提供してきたといえる。国内では、改変された環境を元に戻す取り組みが行われている地域もあるが、在来種がすでに改変環境に適応・依存して生きている場合もある。移入種の駆除や環境復元は注意深く行われるべきである。



写真4. 巣(モクマオウの樹洞)の入り口にとまるメス(南大東島)。

6. 引用・参考文献

- Akatani, K., Matsuo, T. & Takagi, M. in press. Breeding Ecology and Habitat Use of the Daito Scops Owl (*Otus elegans interpositus*) on an Oceanic Island. *Journal of Raptor Research*.
- Severinghaus, L. L., Hsu, Y., Chen, C. & Tsai, C. 2002. Population differentiation of elegant scops owls (*Otus elegans*) on Ryukyu Islands (Abstract). International symposium: Molecular Perspectives on the Process of Dispersals, Isolations and Diversifications of Animals and Plants in the East Asian Islands:31 15-16.
- Takagi, M., Akatani, K., Matsui, S. & Saito, A. 2007. Status of the Daito Scops Owl on Minami-daito Island, Japan. *Journal of Raptor Research* 41(1): 52-56.
- Toyama, M. 2010. Niche differences in syntopic populations of two similar sized scops owl species (*Otus elegans* and *Otus semitorques*): factors facilitating their coexistence. Doctoral thesis, Hokkaido University, 2010.

執筆者

赤谷 加奈



2000年から大阪市立大学理学部動物機能生態学研究室に所属。2002年から8年間、南大東島でダイウコノハズクの研究を行いました。島の生き物と島の人々から、本当にたくさんのことを学ばせてもらいました。生き物の魅力を幅広い層の人に伝えることを目標に、現在デザインワークの修行中です。

活動報告

鳥学講座アンケート 結果その2 ～一番人気は森林性鳥類～ 高木憲太郎

バードリサーチ鳥学講座についてのアンケート結果のご報告第2段は、会員の方が興味を持っている鳥類と講座の形態についてです。鳥の中で一番人気だったのは、森林性鳥類で、草原性鳥類と都市鳥がそれに続きました(図1)。住んでいる地域ごとに傾向を見てみると、北海道ではシギチの興味が低い傾向があり、東北では都市鳥やガンカモ類が低く、その代わりに海鳥の人气が他の地域に比べて高い傾向がありました。関東では都市鳥の人气が高かったのですが、同様に都市環境が多い近畿ではあまり高くなく、シギチドリ類への関心が関東よりも高い傾向がありました。このような地域による興味の差は、アクセスしやすい

	森林鳥	草原鳥	都市鳥	水鳥	シギチ	ガンカモ	海鳥	その他	なし	回答数
北海道	28.1	18.8	12.5	12.5	3.1	9.4	9.4	6.3	0.0	32
東北	28.2	17.9	5.1	7.7	12.8	5.1	12.8	10.3	0.0	39
関東	25.8	18.0	18.6	10.8	9.2	8.2	5.2	3.3	1.0	306
北信越	31.5	20.4	14.8	13.0	5.6	5.6	1.9	5.6	1.9	54
東海	34.5	17.2	13.8	10.3	6.9	3.4	6.9	3.4	3.4	29
近畿	25.0	21.1	11.8	11.8	13.2	6.6	2.6	3.9	3.9	76
中国	21.9	18.8	9.4	15.6	12.5	12.5	6.3	0.0	3.1	32
四国	37.5	12.5	12.5	0.0	12.5	12.5	0.0	0.0	12.5	8
九州	34.8	15.2	8.7	13.0	13.0	6.5	6.5	2.2	0.0	46
沖縄	30.0	0.0	20.0	10.0	20.0	10.0	10.0	0.0	0.0	10
全体	27.5	18.0	14.9	11.2	9.8	7.6	5.5	3.8	1.6	632

図1. アンケート回答者の住まいと興味を持っている鳥類(3つまで選択可)の関係。地域間の比較のため、地域ごと(一行)の合計が100になるように割合に換算してある。

フィールドがあるかどうかの影響していると思いますが、それだけではない地域的な文化の違いがありそうです。今後、鳥学講座を開催する際のテーマ設定の参考にしたいと思います。

講座の日程については、1日や1泊2日など短い期間の方が好まれているようでした。回答者が1940年代～1970年代生まれの現役世代が多かったことが理由の一つだと思います。先日の山中湖での研究集会では野外実習とパソコン実習を取り入れましたが、このような講座の形態については、野外実習の人气が高いことがわかりました。「どれでもよい」という回答を除くと、野外実習を取り入れた講座形態を選んだ人が7割にものぼりました。パソコン実習については、普段シンポジウムなどによく参加するかどうかで傾向が大きく異なり、あまり参加しない人が2割だったのに対して、シンポジウムなどによく参加する人では7割もいました(図2)。野外実習などを取り入れた講座だと1日での実施は難しいので、1泊2日の日程で講座の開催を検討していきたいと思っています。

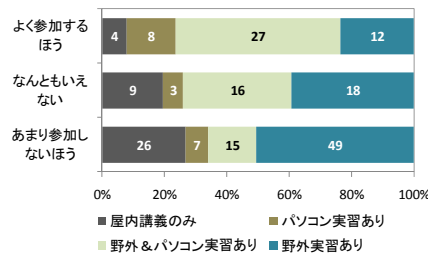


図2. アンケート回答者のシンポジウムなどへの参加傾向と希望する講座の形態。

図書紹介

平成23年版環境白書 循環型社会白書／生物多様性白書

環境省 編／日経印刷株式会社 定価2381円(税別)



環境省の方が事務所に環境白書を持ってきてくれました。今回はCOP10が開催されたこともあり、生きもの関係の内容を充実させることができたそうです。図も多く使われていて、環境に関するいろんなデータを眺めみることができるので、読み物としても面白い内容です。鳥の個体数やフェノロジーの経年変化と比較してみたらどうだろう?と、つい思いを巡らせてしま

いました。バードリサーチが関わった事業も、グラフで掲載されていました。また「鳥類の糞と人類の歴史」というコラムで、僕が撮影したカワウの写真が使われています。写真の提供依頼があった時、被害問題や保護管理がらみだろうと思ったのですが、海と陸を結ぶ栄養塩の提供者という形でカワウを取り上げてもらっていて嬉しかったです。

【高木憲太郎】

いずれ電子版が以下の環境省のホームページに掲載されると思いますが、冊子体でも販売されています。

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/>

バードリサーチニュース 2011年7月号 Vol.8 No.7

2011年7月23日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: カワウ